

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00510

研究課題名(和文) 日韓両国における中国短編白話小説の受容様相比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study on the Reception of Chinese Colloquial Short Stories in Japan and Korea

研究代表者

金 永昊 (KIM, youngho)

東北学院大学・教養教育センター・教授

研究者番号：60712031

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では『古今小説』「閻陰司馬貌断獄」の影響を受けた『夢決楚漢訟』と、中村庄次郎が訳した『今古奇観』の両作品の文学的特質について研究した。

『夢決楚漢訟』は「恨みを晴らすための転生」という判決の方針が徹底的に守られており、それに加えて作者の歴史認識や韓信・劉邦・項羽などの人物についての評価を伺うことが出来た。『今古奇観』の研究では、これまで未詳だった「八銀人」の典拠を明らかにした。そして、原話の内容にそのまま忠実に従ったのではなく、朝鮮語として不自然な人物名は自然な人物名に変えたり、原話の矛盾するところを改変するなど、積極的に原話を活用していることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は韓国における中国白話小説の受容様相について考察したもので、これまでよく行われていた日中・中韓の「縦」に重点を置いた比較研究ではなく、「横」に重点を置いた比較研究を試みたことで大きな学術的意義がある。特に、『夢決楚漢訟』では、これまで検討が行われなかった文学的特質について究明し、『今古奇観』ではこれまで未詳だった典拠を明らかにし、作者の創作意図について指摘できたのは大きな意義がある。

研究成果の概要(英文)： This study examines the literary characteristics of two works influenced by Chinese colloquial short stories: "Mongyeol Chohansong" which was influenced by "Naoyinsi Simamao Duanyu", and the translation of "Jinguqiguan" by Nakamura Shojiro.

"Mongyeol Chohansong" thoroughly adheres to the judgment policy of "reincarnation to avenge grievances." Additionally, it reveals the author's historical appraisal and evaluations of figures such as Han Xin, Liu Bang, and Xiang Yu. In the study of "Jinguqiguan", we have revealed the source of 'Paleunin', which had been unknown until now. Nakamura did not just faithfully translate the original. When translated into Korean, the unnatural names of characters in the original work are changed, and the original contents were changed freely when they were not logically correct.

研究分野：近世文学

キーワード：白話小説 朝鮮文学 今古奇観 中村庄次郎 夢決楚漢訟

## 1. 研究開始当初の背景

江戸時代には当時における現代中国語学、つまり唐話学が流行し、江戸では荻生徂徠の護園、上方では伊藤仁斎・東涯の古義堂がその中心的役割を担った。そして唐話学の教材として利用されたのが、口語体で書かれた中国小説、すなわち白話小説であった。白話小説の中で特に日本で人気を得たのは、長篇の『水滸伝』と短篇の「三言二拍」である。「三言二拍」とは、馮夢龍編『古今小説』(1621刊)、『警世通言』(1624刊)、『醒世恒言』(1627刊)と凌濛初編『拍案驚奇』(1628刊)、『二刻拍案驚奇』(1632刊)の総称で、全200篇を納めている。これらは量が膨大であるため、その中から40篇を収めた『今古奇観』(1632~1644刊)という選集も刊行され、広く流布した。

日本では、岡白駒が訓点と傍訓を付した『小説精言』(1743刊)と『小説奇言』(1753刊)、そして沢田一斎が訓点と傍訓を付した『小説粹言』(1758刊)という「和刻三言」が刊行され、都賀庭鐘による翻案作『英草紙』(1749刊)、ひいては上田秋成により『雨月物語』(1776刊)が生まれたことは周知の通りである。韓国においては、17世紀ごろから短編白話小説が流入はしたものの、一般庶民が本格的に楽しんだのは19世紀末から20世紀初期にかけてであり、計35篇の翻訳・翻案作が知られている。そのうち、「劉元普双生貴子」は『大韓毎日申報』で連載され(1905年8月11日~29日)、成立年未詳の「藤大尹鬼断家私」の翻訳、翻案作が生まれ、「兪伯牙捧琴謝知音」は翻訳2種(写本)、翻訳1種(活字)、翻案4種(写本)の計7種が知られるなど、日本より時代は遅れるものの多彩な翻訳・翻案の様相が見られる。

更に、対馬生まれで朝鮮語通詞としての教育を受けた中村庄次郎(1855-1932)は、1876年に朝鮮語教育をするための教科書として『今古奇観』の一部を翻訳したことも、日韓両国における白話小説の利用を理解することにおいて見逃せないことと思われる。

このような状況の中で、申請者が研究開始当初に問題と指摘したところをまとめると以下の通りである。

- (1) 日本側の底本に関しては、丸井貴史氏による「『今古奇観』諸本考」(『和漢語文研究』第11号、2013)に詳しいが、韓国側の底本に関してはあまり研究が進んでいないと思われる。
- (2) 日本と韓国の短編白話小説の受容様相について、どのような共通点と相違点が見出せるのであろうか。特に、両国ではどのようなところに主眼を置いて翻訳・翻案を試み、相違点が見られるのであれば、いかなるところにその原因が見出され、その意味及び文化的な背景はどこにあるのだろうか。
- (3) 中村庄次郎が試みた朝鮮語訳『今古奇観』について、日本人にとって朝鮮語の学習にも白話小説が使われていたとしたら、白話小説の持つ役割というのはかなり大きかったと思われる。それでは、中村庄次郎は何を底本として使ったのか、翻訳の質はどうか、なぜわざわざ『今古奇観』を朝鮮語に翻訳する必要があったのか。ひいては、近世期、日本人にとって中国語・朝鮮語の学習に白話小説はいかなる意味を持ったのであろうか。

実際に研究をするにあたって、少しの微調整を余儀なくされた場合もあるが、おおむね順調に研究が行われたと評価したい。

## 2. 研究の目的

本研究は日本と韓国における中国短編白話小説の受容様相を比較し、そこから見出せる日本と韓国文学の特質を究明することを目的とする。申請者は韓国で『英草紙』の訳注を刊行（2016年、各話の解説は丸井貴史氏による）し、日本での短編白話小説の受容様相及び研究傾向を韓国に紹介したことがある。しかし、「三言二拍」に代表されるいわゆる短編白話小説の受容様相について、日中・中韓のいわゆる「縦」の比較研究は盛んに行われていても、日韓両国において、「横」の比較は十分な研究が行われていないのが実情である。ここで申請者は日韓両国における短編白話小説の受容様相を比較し、共通点と相違点を比較することによって、両国の根底にある文化的特質を考察するのを目指している。

## 3. 研究の方法

日本の場合、すでに浮世草子時代から白話小説の受容が見られ、高田衛『上田秋成研究序説』（寧楽書房、1968）及び丸井貴史『白話小説の時代』（汲古書院、2019）により詳細な検討が行われてきた。両氏の研究により、18世紀に日本で行われていた短編白話小説の受容の様相はほぼ明らかになっており、韓国の場合、日本よりは遅れて19世紀末から20世紀初期にかけて白話小説受容の全盛期を迎える。

ここで申請者は、

- (1) 韓国における短編白話小説の翻訳・翻案作の本文を整理した。
- (2) 特に、『喻世明言』第31巻「閻陰司司馬貌斷獄」の影響によって、韓国の場合、『諸馬武伝』や『夢決楚漢訟』などの作品群が生まれ、日本も『英草紙』第3巻「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」が生まれている。それでは、いかなるところに日韓における受容の相違点を見出すことができるのだろうか。
- (3) 中村庄次郎が試みた朝鮮語訳『今古奇観』の文学的価値及び意義。

の3点を中心に、原話、日韓の翻訳・翻案作と比較を行い、そこから浮かび上がる日韓両国の文学的特質及びその背景について検討した。

## 4. 研究成果

本研究の研究成果は、大きく『夢決楚漢訟』と中村庄次郎訳『今古奇観』の研究に分けることができる。二つの研究について簡単にまとめると以下の通りである。

### (1) 『夢決楚漢訟』研究

『夢決楚漢訟』は、転生の理由として原作より徹底的に前世での怨みを晴らすことに焦点が当てられていることを指摘した。そして、「玉突き事故」として、新たな人物を設定して配置することによって、その穴を埋めていたことを言及した。例えば、原作の丁公は、劉邦を包囲した時、天下を均分するという甘言を信じて命を助けてあげたが、後に劉邦に殺されたため、冥界では劉邦を訴える。判決では、丁公は周瑜に転生し、孫権の武将として35歳で亡くなるが、その転生の論理は、前世では項羽に仕え通すことができなかったため、来世でも孫権に仕え通すことができないということである。これは丁公の人生に焦点が当てられた判決で、わざわざ劉邦を訴えた意味はどこにあったのか、その怨みがどのようにして解消されたかに関しては疑問が残る。

そこで『夢決楚漢訟』での判決は、丁公が劉邦に対して怨みを持つのは当然であることが認められ、来世では王朗に転生することとなる。そして、曹操に仕えながら献帝を苦しめることによって、前世での劉邦に対する怨念を晴らすという形で、怨みの復讐に焦点が当てられた判決が下される。しかし、このように丁公の転生先が王朗に変わった場合、周瑜に転生すべき人物を新たに設定しなければならなくなる。ここで『夢決楚漢訟』の作者は、周瑜と言えば、赤壁の戦いで曹操の軍を破るような活躍をしたことを一番先に思い浮かべたのか、韓信に対して怨みを持つ酈食其として設定することによって前世での怨みを晴らすようにしている。

このように、「怨みの復讐」という観点から見た場合、『夢決楚漢訟』の全体を通して最も同情的視線を向けられているのは、韓信に道を教えてあげたにもかかわらず殺された樵夫であった。原作での樵夫は全く注目されていないが、『夢決楚漢訟』のほうでは諸葛孔明に転生し、赤壁の戦いでは曹操の軍隊を破ることによって、前世での韓信への怨みを徹底的に晴らすことになる。『西漢演義』での樵夫、『三国志演義』での諸葛孔明は、物語の中で果たしている重要性から見ると全く釣り合わないかもしれない。しかし、「怨みの復讐」の観点からすると、酈食其・龍且・鐘離昧など韓信に対して怨みを持つべき人物がたくさんいる中で、最も大きな怨みを持って復讐すべき人物は樵夫であったのである。

## (2) 中村庄次郎訳『今古奇観』研究

東京大学文学部図書館小倉文庫には対馬の通詞であった中村庄次郎が寄贈した書物が収められている。これは朝鮮時代末期の日本で朝鮮語の教育がどのように行われていたかという点においてとても貴重な資料として評価されている。そのうち、『今古奇観』は中村が21歳の1876年に釜山の草梁公館で翻訳されたもので、申請者は当該作品に対して、文学的な分析を試みた。

まず、『今古奇観』に収録されている話のうち、「両県令成婚事」は「両県令競義婚孤女」、「洞庭紅」は「転運漢巧遇洞庭紅」を翻訳したことはよく知られていたが、「八銀人」は出典未詳とされていた。申請者は「八銀人」が「転運漢巧遇洞庭紅」の入話を翻訳したものであることを明らかにし、中村は原話を二つに分け、入話を「八銀人」とし、正話を「洞庭紅」と題して翻訳をしたことを明らかにした。

本書に収められている3編はいずれも原話を正確に翻訳するというより、細かい人物描写及び中国の文化的な背景を知らないと理解できないところを削除し、原話の骨格を中心に翻訳した抄訳である。しかし、原話の内容にそのまま忠実に従わなかったところも随所に見られる。例えば、文若虚が北京で商売をするため扇子を仕入れる場面は、原作では歴史的に実在した人物を挙げながら彼らが直接詩や絵を描いたものを上等品とするところがあるが、中村は当時の中国の文化的な場面を知らないと理解できないところは全て削除している。また、第1話「両県令成婚事」では、原作では県令の名前が「鍾離義」であるが、この漢字の意味を朝鮮語に訳すと「義」から「離」れることになる。このように、朝鮮語として不自然な人物名は「鍾義」という自然な人物名に変えられている。また、「洞庭紅」の場合、原作では文若虚が吉零国で洞庭紅を売って870倍の利益を挙げているが、これは張承運のような経験豊かな商人であっても9倍の利益を挙げる点からすると、かなり誇張されているか、もしくは、内容的に矛盾していると考えざるを得ない。そこで中村は、10倍程度の利益を挙げる内容として改変し、常識的な内容として改変している。

## 5. おわりに

今回の研究では、コロナの影響で出張が制限され、当初目標としていた「劉元普双生貴子」「藤大尹鬼断家私」「兪伯牙捧琴謝知音」などを含めた幅広い調査ができなかったのは残念であり、今後の課題としたい。しかし、短編白話小説の受容について、これまでは中国文学との「縦」の「つながり」を究明することに研究の中心が置かれていたとすれば、申請者は、日韓両国間のお互いの「横」の「つながり」についてより広い視野から研究を行うことによって、自国文学の特質を相対化して見つめ直すきっかけになったことは、大きな意義があると考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 金永昊	4. 巻 187
2. 論文標題 冥界で行われた明かな判決－韓国における短編白話小説の受容（続）－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北学院大学教養学部論集	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金永昊	4. 巻 65
2. 論文標題 韓国における短編白話小説の受容 『古今小説』第三十一巻「闇陰司馬貌断獄」と『夢決楚漢訟』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 和漢比較文学	6. 最初と最後の頁 19-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金永昊	4. 巻 185
2. 論文標題 夢の中で裁判した戦乱の人たち	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北学院大学教養学部論集	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 金永昊
2. 発表標題 韓国における短編白話小説の受容 『古今小説』第三十一巻「闇陰司馬貌断獄」と『夢決楚漢訟』
3. 学会等名 和漢比較文学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究の成果として「日本人が朝鮮誤訳した中国古典小説-東京大学小倉文庫所蔵『今古奇観』を中心に-」（『日本思想』第46号、韓国日本思想史学会、2024.04、査読付き）が刊行された。この研究は、研究期間中に投稿し掲載が決定されたが、刊行されたのは研究終了後なので、研究業績としてカウントしなかった。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------